

「金色夜叉」初出掲載および現行本対照表

土 佐 亨

はじめに

「金色夜叉」は、足かけ六年にわたって読売新聞に掲載されながら、ついに未完におわった紅葉の最大の長篇である。だが全掲載回数二三五によってもわかるように、休載が掲載の八倍以上もあって新聞小説史上類がなく、読者や新聞社をいらだたせ、紅葉自身も苦しんだのであった。有名なのは、『明治大正文学全集・尾崎紅葉』（昭2・春陽堂）に附された鏡花の「小解」である。

先生が或時、某処の園遊会に出席された。園に、淑女才媛が夥しかった。大塚楠緒子、上田柳村氏夫人など、十幾人が、ばら／＼と初対面の先生を取巻いた。／「先生。」／「先生。」／「——抑も塩原の地形たるは何事でしょう。」／「塩谷郡の南より群峰の間を分けて……どころちやありませんわ、宮さんを何うして下

さるんです。」

主人公たちのなりゆきを知りたいと願う女性読者の切実な声を伝えているものである。もっとも、この鏡花文は、「十千万堂日録」（明34・3・29）の記事によれば、また聞きの鏡花の誤聞ないし誇張があるのではあるが。

また当時の読売新聞には、「^{（は）}葉がき集」という読者投書欄が設けられていたが、そこにも「金色夜叉」への註文などがしきりに寄せられていた。一二を拾ってみよう。

紅葉さん金色夜叉を此頃のやうに怠けると氣違ひのおばあさんの手段を君の家へ再演しますよ此後とも注意して日々出して下さい（ヨコハマ銀色夜叉）——明32・1・16

△氣違ひのおばあさんの手段△とは、現行本文の後篇第七章の狂女の放火のことで、休載すると紅葉の家へ火をつけようという冗談である。また、

大評判の鳥合会へ見物に行つたら自分より先に金色夜叉の絵を見てゐる人があつて連の男に言つて曰く、ウンは此間読売新聞に出てゐた短篇小説だ（何思ひけん子）——明35・4・7

は、掲載してはすぐ休む「金色夜叉」を諷して気のきいた一口落語になっている。鳥合会に出品された金色夜叉の絵というのは、鐙木清方の筆になる宮の入水の図のことである。

また、上司小剣の「U新聞年代記」（第二景）は、当時の読売社内を、社長本野盛亨と主筆中井錦城の会話で伝えている。

本野「時に、尾崎（紅葉）は、どうも小説を書かないで困るが、中井君、どうにかならないものかね。」中井「尾崎のことは、高田（早苗。前主筆で現重役）君にお任せしてあるんでございますが、どうも書けないやうでございますね。」

文学に理解のなかった本野は、「不らち／＼不らち／＼」と叫び（『読売新聞八十年史』一六五頁）、中に立つて苦慮することのしばしばであった高田は、編集から遠ざかつていた関係から市島春城が代り、推敲無類の紅葉の原稿を社長に示してなだめたこともあったという（『半峯昔ばなし』一二七頁）。

もちろん紅葉自身も苦しんでいた。「十千万堂日録」の

明治三十四年一月二十二日に、紅葉は次のように述べている。

余の新聞社に入りて茲に十星霜、然れども此の続々金色夜叉を草して本年に入りたる如く、休筆の連（しきり）にして、詩思無きにあらざれど、筆を執るの氣を発せざるは、未だ曾て有らざる所也。日就社に對して深く疎狂放恣の過ぐるを愧づ。一に胃患の為に妨げられ、二に客來の為に碍げられ、三に推敲の為に礙げらる、之を金色夜叉の三害と作すか。

まだ本人は胃ガンとは知らなかったが、胃の不快を毎日訴えている。客來の絶えないのも日記の示すところであり、この日記本文にすら入さまたげるVの字を入妨・碍・礙Vと区別しなければすまない文字魔の紅葉であった。

以上、周知のものも引用しつつ、「金色夜叉」の進行に對する周囲の反応や紅葉の感想の一斑を眺めてみた。しかしこれらのことがらも、基本的には、厳密に掲載状況と對應して考えねばならないものであろう。従来「金色夜叉」の掲載状況について記したものは若干あるが、極めて大まかであり、また誤っているものもあった。読売新聞を見ればすむことであるが、そのつどの検索の煩を簡便化することの必要を私自身は感じていた。入抑も塩原の地形たる：Vの部分の発表年月日も、すぐにはわからなかったのである。また、休載をはさむ長期間にわたる執筆が、構想に

関連してくることが考えられるようになり、何月何日にはどこまで書かれていたのかを追跡する要も起ってきた。初出本文を容易に手もとにおくことのできない現時点では、現行本文で考えることも多いわけだが、その点から現行本文で位置を知る必要がある。それこれの理由から、掲載一覧表を現行本と対照させて作製しておくことの必要性を私自身は感じているわけだが、いたずらにトリビアルだと批判する向きのあることを恐れている。とにかく従来の記述を細密化、正確化して、今後の多方面の利用に供すべく、あえて資料として提出することにした。

対照に用いる現行本には、中央公論社版全集と、角川書店の『日本近代文学大系』の二種を採用した。前者は、初めて学問的に校訂されて画期的な定本として今日に至っているものであり、後者は、前者をさらに改訂して最新刊の入手に便なものである。

凡 例

一、本表は、「金色夜叉」がどのように発表されたか、そして発表個所が現行本のどの部分に当たるかを知るためのものである。

一、本表は、初出題名に従って、順次に分けて作成した。

一、表の見方は次のとおりである。上より順次に段をかぞえる。

第一段

読売新聞における初出本文の掲載年月日。

第二段

同じく当日の初出本文の見出しの章段。誤りは、△ママ▽としてそのまま記載した。

第三段

同じく当日の初出本文の冒頭の数句を、適当に掲げた。

第四段

「(校1)」などとあるのは、第三段の文句が、現行本と差異のあるもので、校異については各表の終りに記した。「付1」などとあるのは、当日の初出本文の末尾に付記のあるもので、各表の終りにそのまま掲げた。「○」印は、当日の初出本文に挿画のあるもの。なお画家は梶田半古である。

第五段

初出本文に相当する現行本の章段。(A)(B)ともに通用。

第六・七段

塩田良平校訂「金色夜叉」(中央公論社『尾崎紅葉全集』第六巻、昭16)において、初出本文に相当する部分の「冒頭の位置を示すページ数(漢数字)」と行数(アラビア数字)。「(A)中公版全集本」と略記。

第八・九段

同じく、岡保生注釈「金色夜叉」(角川書店『日本近代文学大系5…尾崎紅葉集』昭46)において、相当位置の冒頭を示すページ数と行数。「(B)角川大系本」と略記。

一、たての点線による罫は五行(回)ごとに引いたもので、検索の便以外の意味はない。

金色夜叉 (明治30・1・1—2・23 三三回)

紅葉

対照本文「金色夜叉 前編」

読 売 新 聞 初 出					(A)中公版全集本					(B)角川大系本					
掲載年月日	章 段	冒 頭	備考	章 段	頁	行	頁	行	掲載年月日	章 段	冒 頭	備考	章 段	頁	行
明治30・1・1	(一)の二	未だ宵ながら 箕輪の奥は 綱曳にて駈着けし お俊は骨牌の席に 男たちは自から		(一)の二	三	1	五四	1	明治30・1・1	(一)の二	未だ宵ながら 箕輪の奥は 綱曳にて駈着けし お俊は骨牌の席に 男たちは自から		(一)の二	五四	1
2	(壹)の三			(壹)の三	六	1	五六	6	3	(壹)の四			(壹)の四	五八	4
3	(壹)の四			(壹)の四	八	3	五九	5	7	(壹)の五			(壹)の五	六二	20
8	(壹)の五			(壹)の五	一二	14	六二	1	8	(壹)の六			(壹)の六	六三	19
9	(二)の六	「では御意に召したのが 骨牌の會は 間貫一の十年來 彼は貴人の奥方の 漆の如き闇の		(二)の六	一五	5	六三	19	9	(二)の七			(二)の七	六六	1
11	(三)の一			(三)の一	一八	4	六六	1	11	(三)の二			(三)の二	七〇	11
14	(三)の壹			(三)の壹	二二	1	六八	17	14	(三)の三			(三)の三	七一	12
15	(三)の二			(三)の二	二三	14	七一	11	15	(三)の四			(三)の四	七三	17
17	(四)の一			(四)の一	二五	4	七三	14	17	(四)の二			(四)の二	七五	15
18	(四)の二	「酔つて居るでせう 或日箕輪の内儀は 人の氣勢に驚きて 「それは病氣の所爲だ 其翌々日なりき		(四)の二	二八	1	七五	14	18	(五)の二			(五)の二	七七	18
23	(五)の壹			(五)の壹	三一	7	七九	15	23	(五)の三			(五)の三	八一	11
24	(五)の二			(五)の二	三三	4	八三	13	24	(五)の四			(五)の四	八五	9
27	(六)の壹			(六)の壹	三八	7	八七	5	27	(六)の二			(六)の二	九一	13
28	(六)の二	貫一は猶も思續けつ 翌日果して熱海より 「で、私もまあ一安心		(六)の二	四一	1	九三	13	28	(六)の三			(六)の三	九五	9
31	(六)の三			(六)の三	四三	5	九五	9	31	(六)の四			(六)の四	九七	5
3	(六)の四			(六)の四	四五	11	九七	5	3	(六)の五			(六)の五	九九	5
2	(六)の五			(六)の五	四七	11	九九	5	2	(六)の六			(六)の六	一〇一	5
2	(六)の六			(六)の六	四九	11	一〇三	5	2	(六)の七			(六)の七	一〇五	5
3	(六)の七			(六)の七	五一	11	一〇七	5	3	(六)の八			(六)の八	一〇九	5
3	(六)の八			(六)の八	五三	11	一一一	5	3	(六)の九			(六)の九	一一三	5
3	(六)の九			(六)の九	五五	11	一一五	5	3	(六)の十			(六)の十	一一七	5
3	(六)の十			(六)の十	五七	11	一二一	5	3	(六)の十一			(六)の十一	一二三	5
3	(六)の十一			(六)の十一	五九	11	一二五	5	3	(六)の十二			(六)の十二	一二七	5
3	(六)の十二			(六)の十二	六一	11	一二九	5	3	(六)の十三			(六)の十三	一三〇	5
3	(六)の十三			(六)の十三	六三	11	一三三	5	3	(六)の十四			(六)の十四	一三五	5
3	(六)の十四			(六)の十四	六五	11	一三五	5	3	(六)の十五			(六)の十五	一三七	5
3	(六)の十五			(六)の十五	六七	11	一三七	5	3	(六)の十六			(六)の十六	一三九	5
3	(六)の十六			(六)の十六	六九	11	一四一	5	3	(六)の十七			(六)の十七	一四一	5
3	(六)の十七			(六)の十七	七一	11	一四三	5	3	(六)の十八			(六)の十八	一四三	5
3	(六)の十八			(六)の十八	七三	11	一四五	5	3	(六)の十九			(六)の十九	一四五	5
3	(六)の十九			(六)の十九	七五	11	一四七	5	3	(六)の二十			(六)の二十	一四七	5
3	(六)の二十			(六)の二十	七七	11	一四九	5	3	(六)の二十一			(六)の二十一	一四九	5
3	(六)の二十一			(六)の二十一	七九	11	一五一	5	3	(六)の二十二			(六)の二十二	一五一	5
3	(六)の二十二			(六)の二十二	八一	11	一五三	5	3	(六)の二十三			(六)の二十三	一五三	5
3	(六)の二十三			(六)の二十三	八三	11	一五五	5	3	(六)の二十四			(六)の二十四	一五五	5
3	(六)の二十四			(六)の二十四	八五	11	一五七	5	3	(六)の二十五			(六)の二十五	一五七	5
3	(六)の二十五			(六)の二十五	八七	11	一五九	5	3	(六)の二十六			(六)の二十六	一五九	5
3	(六)の二十六			(六)の二十六	八九	11	一六一	5	3	(六)の二十七			(六)の二十七	一六一	5
3	(六)の二十七			(六)の二十七	九一	11	一六三	5	3	(六)の二十八			(六)の二十八	一六三	5
3	(六)の二十八			(六)の二十八	九三	11	一六五	5	3	(六)の二十九			(六)の二十九	一六五	5
3	(六)の二十九			(六)の二十九	九五	11	一六七	5	3	(六)の三十			(六)の三十	一六七	5
3	(六)の三十			(六)の三十	九七	11	一六九	5	3	(六)の三十一			(六)の三十一	一六九	5
3	(六)の三十一			(六)の三十一	九九	11	一七一	5	3	(六)の三十二			(六)の三十二	一七一	5
3	(六)の三十二			(六)の三十二	一〇一	11	一七三	5	3	(六)の三十三			(六)の三十三	一七三	5
3	(六)の三十三			(六)の三十三	一〇三	11	一七五	5	3	(六)の三十四			(六)の三十四	一七五	5
3	(六)の三十四			(六)の三十四	一〇五	11	一七七	5	3	(六)の三十五			(六)の三十五	一七七	5
3	(六)の三十五			(六)の三十五	一〇七	11	一七九	5	3	(六)の三十六			(六)の三十六	一七九	5
3	(六)の三十六			(六)の三十六	一〇九	11	一八一	5	3	(六)の三十七			(六)の三十七	一八一	5
3	(六)の三十七			(六)の三十七	一一一	11	一八三	5	3	(六)の三十八			(六)の三十八	一八三	5
3	(六)の三十八			(六)の三十八	一一三	11	一八五	5	3	(六)の三十九			(六)の三十九	一八五	5
3	(六)の三十九			(六)の三十九	一一五	11	一八七	5	3	(六)の四十			(六)の四十	一八七	5
3	(六)の四十			(六)の四十	一一七	11	一八九	5	3	(六)の四十一			(六)の四十一	一八九	5
3	(六)の四十一			(六)の四十一	一一九	11	一九一	5	3	(六)の四十二			(六)の四十二	一九一	5
3	(六)の四十二			(六)の四十二	一二一	11	一九三	5	3	(六)の四十三			(六)の四十三	一九三	5
3	(六)の四十三			(六)の四十三	一二三	11	一九五	5	3	(六)の四十四			(六)の四十四	一九五	5
3	(六)の四十四			(六)の四十四	一二五	11	一九七	5	3	(六)の四十五			(六)の四十五	一九七	5
3	(六)の四十五			(六)の四十五	一二七	11	一九九	5	3	(六)の四十六			(六)の四十六	一九九	5
3	(六)の四十六			(六)の四十六	一二九	11	二〇一	5	3	(六)の四十七			(六)の四十七	二〇一	5
3	(六)の四十七			(六)の四十七	一三〇	11	二〇三	5	3	(六)の四十八			(六)の四十八	二〇三	5
3	(六)の四十八			(六)の四十八	一三二	11	二〇五	5	3	(六)の四十九			(六)の四十九	二〇五	5
3	(六)の四十九			(六)の四十九	一三四	11	二〇七	5	3	(六)の五十			(六)の五十	二〇七	5
3	(六)の五十			(六)の五十	一三六	11	二〇九	5	3	(六)の五十一			(六)の五十一	二〇九	5
3	(六)の五十一			(六)の五十一	一三八	11	二一一	5	3	(六)の五十二			(六)の五十二	二一一	5
3	(六)の五十二			(六)の五十二	一四〇	11	二一三	5	3	(六)の五十三			(六)の五十三	二一三	5
3	(六)の五十三			(六)の五十三	一四二	11	二一五	5	3	(六)の五十四			(六)の五十四	二一五	5
3	(六)の五十四			(六)の五十四	一四四	11	二一七	5	3	(六)の五十五			(六)の五十五	二一七	5
3	(六)の五十五			(六)の五十五	一四六	11	二一九	5	3	(六)の五十六			(六)の五十六	二一九	5
3	(六)の五十六			(六)の五十六	一四八	11	二二一	5	3	(六)の五十七			(六)の五十七	二二一	5
3	(六)の五十七			(六)の五十七	一五〇	11	二二三	5	3	(六)の五十八			(六)の五十八	二二三	5
3	(六)の五十八			(六)の五十八	一五二	11	二二五	5	3	(六)の五十九			(六)の五十九	二二五	5
3	(六)の五十九			(六)の五十九	一五四	11	二二七	5	3	(六)の六十			(六)の六十	二二七	5
3	(六)の六十			(六)の六十	一五六	11	二二九	5	3	(六)の六十一			(六)の六十一	二二九	5
3	(六)の六十一			(六)の六十一	一五八	11	二三一	5	3	(六)の六十二			(六)の六十二	二三一	5
3	(六)の六十二			(六)の六十二	一六〇	11	二三三	5	3	(六)の六十三			(六)の六十三	二三三	5
3	(六)の六十三			(六)の六十三	一六二	11	二三五	5	3	(六)の六十四			(六)の六十四	二三五	5
3	(六)の六十四			(六)の六十四	一六四	11	二三七	5	3	(六)の六十五			(六)の六十五	二三七	5
3	(六)の六十五			(六)の六十五	一六六	11	二三九	5	3	(六)の六十六			(六)の六十六	二三九	5
3	(六)の六十六			(六)の六十六	一六八	11	二四一	5	3	(六)の六十七			(六)の六十七	二四一	5
3	(六)の六十七			(六)の六十七	一七〇	11	二四三	5	3	(六)の六十八			(六)の六十八	二四三	5
3	(六)の六十八			(六)の六十八	一七二	11	二四五	5	3	(六)の六十九			(六)の六十九	二四五	5
3	(六)の六十九			(六)の六十九	一七四	11	二四七	5	3	(六)の七十			(六)の七十	二四七	5
3	(六)の七十			(六)の七十	一七六	11	二四九	5	3	(六)の七十一			(六)の七十一	二四九	5
3	(六)の七十一			(六)の七十一	一七八	11	二五一	5	3	(六)の七十二			(六)の七十二	二五一	5
3	(六)の七十二			(六)の七十二	一八〇	11	二五三	5	3	(六)の七十三			(六)の七十三	二五三	5
3	(六)の七十三			(六)の七十三	一八二	11	二五五	5	3	(六)の七十四			(六)の七十四	二五五	5
3	(六)の七十四			(六)の七十四	一八四	11	二五七	5	3	(六)の七十五			(六)の七十五	二五七	5
3	(六)の七十五			(六)の七十五	一八六	11	二五九	5	3	(六)の七十六			(六)の七十六	二五九	5
3	(六)の七十六			(六)の七十六	一八八	11	二六一	5	3	(六)の七十七			(六)の七十七	二六一	5
3	(六)の七十七			(六)の七十七	一九〇	11	二六三	5	3	(六)の七十八			(六)の七十八	二六三	5
3	(六)の七十八			(六)の七十八	一九二	11	二六五	5	3	(六)の七十九			(六)の七十九	二六五	5
3	(六)の七十九			(六)の七十九	一九四	11	二六七	5	3	(六)の八十			(六)の八十	二六七	5
3	(六)の八十			(六)の八十	一九六	11	二六九	5	3	(六)の八十一			(六)の八十一	二六九	5
3	(六)の八十一			(六)の八十一	一九八	11	二七一	5	3	(六)の八十二			(六)の八十二	二七一	5
3	(六)の八十二			(六)の八十二	二〇〇	11	二七三	5	3	(六)の八十三			(六)の八十三	二七三	5
3	(六)の八十三			(六)の八十三	二〇二	11	二七五	5	3	(六)の八十四			(六)の八十四	二七五	5
3	(六)の八十四			(六)の八十四	二〇四	11	二七七	5	3	(六)の八十五			(六)の八十五	二七七	5
3	(六)の八十五			(六)の八十五	二〇六	11	二七九	5	3	(六)の八十六			(六)の八十六	二七九	5
3	(六)の八十六			(六)の八十六	二〇八	11	二八一	5	3	(六)の八十七			(六)の八十七	二八一	5
3	(六)の八十七			(六)の八十七	二一〇	11	二八三	5	3	(六)の八十八			(六)の八十八	二八三	5
3	(六)の八十八			(六)の八十八	二一二	11	二八五	5	3	(六)の八十九			(六)の八十九	二八五	5
3	(六)の八十九			(六)の八十九	二一四	11	二八七	5	3	(六)の九十			(六)の九十	二八七	5
3	(六)の九十			(六)の九十	二一六	11	二八九	5	3	(六)の九十一			(六)の九十一	二八九	5
3	(六)の九十一			(六)の九十一	二一八	11	二九一	5	3	(六)の九十二			(六)の九十二	二九一	5
3															

23	21	20	18	17	16	15	12	11	10	9	6	5	4
(八)の六	(八)の五	(八)の四	(八)の三	(八)の二	(八)の壹	(七)の五	(七)の四	(七)の三	(七)の貳	(七)の壹	(六)の七	(六)の六	(六)の五
「雀が米を食ふのは 「嗚呼、私は如何したら		唯繼と貫一とを左右に 打霞みたる空ながら 宮は可悲と可懼に 「吁、宮さん、恁して二人が 今ははや言ふも益無ければ					又人の入來る氣勢なるを 「御歸になつたら 宮は何心無く 熱海は東京に比して 貫一は彼の説進むに					「お前に約束をして置いて 「嫁に遣ると有仰るのは	
付1													
		第八章					第七章						
七九	七七	七四	七二	六九	六七	六四	六一	五九	五六	五四	五一	四九	四七
14	6	15	9	15	6	8	14	9	15	1	13	8	9
一一五	一一二	一一〇	一〇八	一〇六	一〇五	一〇二	一〇〇	九八	九六	九四	九二	九〇	八八
2	19	18	18	18	1	14	10	12	8	3	7	8	15

(校1)

付
1

は來る三月三日より續々掲載す

後篇 金色夜叉 (明治30・9・5—11・6 五一回)

紅葉散人

対照本文「金色夜叉 中編」

明治30・9・5																			
5	6	7	8	9	10	11	12	14	15	16	17	18	19	20	21	23	24	25	27
(一)の二	(壹)の三	(壹)の四	(二)の壹	(二)の貳	(二)の三	(二)の四	(二)の五	(二)の六	(二)の七	(二)の壹	(三)の二	(三)の三	(三)の四	(三)の五	(三)の六	(三)の七	(四)の壹	(四)の二	(四)の三
新橋停車場の 佐分利は幾數回頷きて 葡萄酒の紅を嚙り 暫く話の絶えける間に 柵の柱の下に在りて					二人は停車場を出でゝ とかくする間に盃盤は 彼は色を正して 「それは如何いふ理ですか 僅に恠く言ひ放ちて					満枝は彼の言の 赤坂氷川の邊に 殿は此失望の極 貫一は鰐淵の裏二階なる 毒は毒を以つて					然れども彼は今も仍 お峯は其の言はむとする所を 「今朝出掛けたのも 貫一は直に車を飛して 畔柳元衛の娘				
付2																			
第一章										第三章					(四)ノ二				
八五	八七	九〇	九三	九六	九九	一〇二	一〇五	一〇八	一一一	一一三	一一六	一二八	一二〇	一二一	一二三	一二五	一二八	一三一	一三三
1	13	10	1	10	8	12	3	1	2	11	10	12	4	12	4	14	10	4	9
一一八	一二〇	一二二	一二四	一二七	一二九	一三一	一三三	一三六	一三八	一四〇	一四二	一四四	一四五	一四六	一四七	一五〇	一五二	一五四	一五六
1	9	12	10	8	10	20	19	2	11	11	16	8	12	18	21	1	5	7	1

28 27 26 25 24					21 19 18 16 15					14 13 12 11 10					9 6 5 4 3					10 2 1 30 29 28				
(七)の一	(六)の十	(六)の九	(六)の八	(六)の七	(六)の六	(六)の五	(六)の五	(六)の三	(六)の二	(五)の一	(五)の五	(五)の四	(五)の三	(五)の二	(五)の一	(四)の十一	(四)の十	(四)の九	(四)の八	(四)の七	(四)の六	(四)の五	(四)の四	(四)の三
人の言に手は弛めたれど 「全く行かんのですから 身を起すと與に貫一は 二人は蒲田が案外の 茫々たる世間に					遊佐も道れ難き義理に 折から襖の開きけるを 「遊佐君の借財の件 遊佐は獨に計ひかねて 蒲田は物をも言はず					遊「君の後曳も 遊佐は二階に昇り 「濡れぬ内こそ 風「常談どころぢやない 座敷には寢める					樓を下りて此に 是より歸りて左も右も 宮は此散歩の間に いでや事の様を見むとて 遊佐良橋は郷里に					貴婦人は此秋霽の 旋て双眼鏡は貴婦人の 良有りて貴婦人は徐に 此の貴婦こそ富山宮子にて 「お宅は？				
付4					(校6)					付3					(校4)					(校3)				
第七章										第六章					第五章					(四)ノ三				
一九六	一九三	一九〇	一八八	一八五	一八二	一七九	一七七	一七四	一七一	一六九	一六五	一六三	一六〇	一五七	一五五	一五二	一四九	一四七	一四五	一四三	一四一	一三九	一三七	一三五
1	5	13	4	7	11	13	8	15	14	2	13	1	7	8	1	3	15	10	13	11	12	12	3	11
二〇四	二〇二	二〇〇	一九八	一九六	一九四	一九一	一八九	一八七	一八五	一八三	一八一	一七八	一七六	一七四	一七三	一七〇	一六八	一六六	一六五	一六三	一六二	一六〇	一五八	一五七
10	7	7	7	2	1	18	20	21	12	11	2	21	20	16	1	13	19	20	12	17	7	16	17	13

續 金 色 夜 叉 (明治31・1・14 | 4・1 四九回)

こ う え ふ

対照本文「金色夜叉 後編」

明治31・1・14																			
18	17	16	15	14	24	23	22	21	19	9	7	6	4	2・3	16	15	14	13	12
(壹)の五	(壹)の四	(壹)の三	(壹)の二	(壹)	(貳)の二	(貳)	(壹)の八	(壹)の七	(壹)の六	(貳)の七	(貳)の六	(貳)の五	(貳)の四	(貳)の三	(三)の五	(三)の四	(三)の参	(三)の貳	(貳)の七マ
翌々日の諸新聞は「どうも飛んだ事で「お前又お父様の前で渾打去みて直道は「おゝ、直道か					些も動ずる色無き直道は先づ嚴に直道は今日を限と主人公なる間貫一が彼の出でゝ歸らざる					子を生みし後も宮は貫一が事を忘れざると此寒き日を此煖き室に「近頃はお前別して宮は既に富むと裕なるとに					其雪は明方になりて母は不圖思起してや「然う？お父様は「それは然うでも「那樣に言ふのなら				
第壹章					第貳章					(貳)の二 第三章									
二二三	二一五	二一七	二二〇	二二二	二二五	二二七	二二九	二三二	二三四	二三五	二三七	二三八	二四一	二四三	二四五	二四七	二四九	二五二	二五三
1	6	13	1	1	1	5	13	10	3	10	3	15	4	6	4	8	13	1	15
二一七	二一九	二二〇	二二二	二二四	二二六	二二八	二三〇	二三二	二三三	二三五	二三六	二三七	二三九	二四一	二四二	二四四	二四六	二四八	二四九
1	1	20	1	8	14	11	13	16	18	1	7	18	14	7	15	12	8	3	16

28 27 25 24 21					20 19 18 17 16					15 11 10 9 7					5 4 3 28 25					24 23 21 20 19				
(七)の二					(六)の三					(五)の五					(四)の六					(四)の一				
(七)の五					(六)の六					(五)の七					(五)の二					(四)の二				
(七)の四					(六)の五					(五)の六					(五)の壹					(四)の三				
(七)の三					(六)の四					(五)の七					(五)の二					(四)の三				
我が煩悶の活を					子が讐なる直行が					終日灰色に打曇りて					婆は鴨澤の前に					陰には己自ら				
住むべき家の痕跡も無く					無益に言を用ゐんより					容儀人の娘とは見えず					案内せる附添の婆は					胡麻摺羅紗の地厚なる				
人々出合ひて打騒ぐ比には					爾思へりしのみにて					我強くも貫一は					「然やうかな。如何さま					例の煩はしき人は				
狂女は果して					彼は泣きてく止まず					(校9)					檜葉、縦などの					「お内にも御病人の				
槍は降りても必ず					子の讐なる直行が					我強くも貫一は					(校8)					胡麻摺羅紗の地厚なる				
(七)の二					第七章					第六章					第五章					第四章				
二九七					二八八					二七八					二六七					二五六				
三〇〇					二九一					二八〇					二七〇					二五八				
三〇一					二九二					二八二					二七三					二六〇				
三〇三					二九四					二八四					二七四					二六三				
三〇四					二九六					二八六					二七六					二六五				
15 3 9 7 12					14 1 8 5 4					9 6 8 1 12					11 8 1 13 6					7 6 12 3 10				
二八三					二七六					二六八					二六〇					二五一				
二八五					二七八					二七〇					二六二					二五三				
二八六					二七九					二七一					二六四					二五四				
二八八					二八〇					二七三					二六五					二五六				
二八九					二八二					二七四					二六七					二五八				
19 14 18 7 9					12 7 11 21 12					15 5 19 1 21					6 10 7 16 1					13 3 21 18 15				

4 1	31	30	29
(七)の十	(七)の九	(七)の八	(七)の七
<p>焼瓦の踏破かるゝ音に 生暖き風は急に 夜は太く更けにければ 彼の潔しと謂ふなる</p>			
付6			
三一 一	三〇 九	三〇 八	三〇 六
8	11	1	2
二九 四	二九 三	二九 二	二九 〇
19	12	3	12

(校8) 前では↓前で

(校9) 貫一は↓貫一の

付6

(續篇をはり)／續金色夜叉ここに稿を了ふ著者紅葉更に材料を蒐め五月上旬より續々金色夜叉を出さんとす讀者幸に紅葉をして文を練り想を養ふの餘裕を得せしめよ

續々金色夜叉 (明治32・1・1—34・4・8 八九回)

紅葉 (紅葉山人)

対照本文

最初から明治34年1月27日までが「續金色夜叉」、同年1月30日から最後までが「續續金色夜叉」。
なお34年1月30日より署名が△紅葉山人▽となる。

明治32・1・1																								
7	6	3	2	1	16	15	10	9	8	30	28	23	20	19	3	12	8	5	1	30	28	23	20	19
(壹)	(壹)	(壹)	(壹)	(壹)	(貳)	(貳)	(貳)	(貳)	(貳)	(四)	(三)	(三)	(三)	(三)	(四)	(四)	(四)	(四)	(四)	(四)	(三)	(三)	(三)	(三)
の二	の三	の三	の二	の二	の五	の四	の三	の三	の二	の五	の四	の四	の三	の二	の六	の五	の四	の三	の二	の五	の四	の四	の三	の二
時を錢なりとして	「瓢空しく夜は	いと更に面の	「荒尾さんで被在いましたか	鬚深き横面に	吁、吾が罪	「それでは此上甚麼に	「那様事は管ひません	果て人の入來て	門々の松は除かれて	十九にして戀人を	官は知らず貌に	夫を玄關に送出でし	良有りて彼は嬾く	主夫婦を併せて	學校友達と名乗し	貫一は頭を低れて	「而して君は妻君を	「其は僕が慰められるよりは	「解つても解らんでも					
第壹章	第貳章	第參章	(三)の二	第四章	(四)の二																			
三一九	三二一	三二三	三二五	三二八	三三〇	三三二	三三四	三三六	三三九	三四一	三四四	三四六	三四八	三五〇	三五三	三五五	三五七	三五九	三六二					
1	5	5	10	2	5	7	8	7	1	2	4	12	5	1	2	4	5	13	3					
二九八	二九九	三〇一	三〇三	三〇五	三〇六	三〇八	三一〇	三一〇	三一三	三一五	三一七	三一九	三二〇	三二二	三二四	三二六	三二八	三三〇	三三一					
4	21	13	9	7	20	15	8	18	16	9	17	15	19	5	13	7	1	1	17					

					33 ・ 12 ・ 4										5 ・ 9					4 ・ 1				
24	23	22	21	6	5	4	28	27	25	20	18	16	14	13	10	9	8	6	4	1	28	27	22	18
(七) の七	(七) の六	(七) の五	(七) の四	(七) の三	(七) の二	(七)	(六) の九	(六) の八	(六) の七	(六) の六	(六) の五	(六) の四	(六) の三	(六) の二	(六)	(五) の五	(五) の四	(五) の三	(五) の二	(五)	(四) の十	(四) の九	(四) の八	(四) の七
「あゝ、未だ御在でしたか 「間さん、貴方、然う 犬にも非ず 「では、屹度有仰つて 這は何事と駭ける					貫一は此の情緒の 家の内を隈無く 「はい、……廣島の 有効無き此の侵辱に 座敷外に脱ぎたる					「貫一さん、私は今日は 良久しかるに客の 「さあ、早く歸れ 打續きて宮が音信の 「荒尾さんと有仰るのは					千葉より歸りて 今彼娘の宮ならば さて男の聲は聞ゆ 女は唯愈よ咽び 間有りて婢どもの					遽に千葉に行く事 「まあ然云ふ事を言はずに 程もあらずラムプは 満枝は先づ主に 「うゝ、それぢや君は				
〇 〇 〇 〇					〇 〇 (校10)																			
					第七章					(六)の二					第六章					(四)の三 第五章				
四一八	四一六	四一三	四一一	四〇九	四〇七	四〇四	四〇二	四〇〇	三九七	三九五	三九三	三九〇	三八八	三八六	三八四	三八二	三七九	三七八	三七五	三七四	三七一	三六八	三六五	三六四
2	3	15	8	6	10	9	9	7	6	3	5	12	12	9	5	4	15	4	15	1	7	11	14	3
三七五	三七三	三七二	三七〇	三六八	三六七	三六五	三六三	三六一	三五九	三五七	三五六	三五四	三五二	三五〇	三四九	三四七	三四五	三四四	三四二	三四一	三三八	三三七	三三四	三三三
7	15	2	5	13	3	1	7	13	9	15	5	4	14	20	4	11	13	5	10	1	21	1	18	10

28 25 24 22 17					15 14 11 9 8					5 3 30 27 26					24 23 18 17 14					34 ・ 1 ・ 12 1 28 26 25				
(拾壹) (十)の八 (十)の七 (十)の六 (十)の五					(十)の四 (十)の三 (十)の二 (十) (九)の四					(九)の三 (九)の二 (九) (八)の九 (八)の八					(八)の七 (八)の六 (八)の五 (八)の四 (八)の三					(八)の二 (八) (七)の十 (七)の九 (七)の八				
<p>明る朝の食後 風恬に草香りて 彼は食事を了りて 拍子抜して返れる貫一は 彼の男女は悦しさに</p>					<p>既に如此くなれば 一村十二戸、温泉は 樓前の縁は漸く 風呂場に入れば 主の辭し去りて後</p>					<p>貫一は彼の死の餘りに 「爾来今日迄の六年間 貫一が胸は益す 車は駛せ、景は 途ながら前面の崖の</p>					<p>此の恐るべき危機に 「私は是で死んで了へば 「貫、貫一さん 磐石を曳くより苦しく あな、凄まじ、と貫一は</p>					<p>貫一は幾と答ふる所を 「就きましては、私今から 切なりと謂はゞ 家の内には己と老婢との 「何爲成敗は遊ばしません</p>				
○ ○ ○ ○ ○					○ ○ ○ ○ ○					○ ○ ○					○ ○					○ ○ ○ ○ ○				
第參章										(一)の二 第壹章										第八章				
四七一 四六八 四六六 四六四 四七〇					四五二 四五三 四五五 四七七 四五九					四四〇 四四二 四四七 四四九 四五〇					四三一 四三二 四三四 四三六 四三八					四二〇 四二二 四二四 四二七 四二九				
1 2 5 7 12					2 2 5 10 2					9 1 1 4 4					4 10 9 9 2					7 1 9 11 8				
四一四 四一二 四一〇 四〇九 四〇七					四〇五 四〇三 四〇二 四〇一 四〇〇					三九八 三九七 三九六 三九四 三九三					三九一 三九〇 三八八 三八六 三八五					三八四 三八二 三八〇 三七八 三七七				
1 10 21 11 12					11 21 15 7 3					19 15 1 13 3					10 3 11 20 15					8 11 13 21 5				

(校10) 貫一↓彼
(校11) 其代に↓其代り

4 8 7 31 30					27 26 24 22 21					19 18 16 13 12					10 8 5 4 1				
(十三)の九					(十三)の四					(拾三)の二					(拾壹)の二				
(十三)の十					(十三)の五					(拾二)の二					(拾壹)の三				
(十三)の十一					(十三)の六					(十三)の二					(拾壹)の四				
(十三)の十二					(十三)の七					(十三)の三					(拾壹)の五				
<p>「勿論然う無けりや 「細君に就いて何云ふ話が 恰も我名の出でしまゝに 貫一が久渴の心は</p>					<p>狭山は旋て銚子を 貫一は氣を嚴肅にして 「はゝあ。然うすると 「と申すのには、少し 「御承知で御座いますか</p>					<p>両箇は此方に且泣き 晝間の程は昃めて 両箇は較熱かりし 「其代に、偶として 女は何氣無く受けながら</p>					<p>「悪縁だから悪縁だと 「慍う成るのも皆 「所歡の有る女が金で 「其ちや私も赫として 「所が、好かつた事には</p>				
○					○ ○ ○					○ ○ ○ ○ ○ (校11)					○ ○ ○ ○ ○				
					第五章					(三)の二 第四章									
五一〇	五〇八	五〇六	五〇四	五〇二	五〇一	四九九	四九七	四九五	四九三	四九〇	四八八	四八六	四八三	四八二	四八〇	四七八	四七六	四七四	四七二
5	11	10	9	8	14	11	9	3	1	13	15	1	15	1	4	13	11	15	6
四四五	四四三	四四二	四四〇	四三九	四三八	四三六	四三五	四三三	四三一	四二九	四二八	四二六	四二四	四二三	四二一	四二〇	四一九	四一七	四一五
2	18	2	8	12	10	16	1	5	12	16	8	6	16	6	20	17	2	14	15

續々金色夜叉

篇續 (明治35・4・1—5・11 一四回)

紅葉山人

対照本文「新續金色夜叉」

明治35・4・1														
1	2	3	4	6	16	18	20	21	23	1	2	5	11	
(壹)	(壹)	(壹)	(壹)	(壹)	(貳)	(貳)	(貳)	(貳)	(貳)	(貳)	(貳)	(貳)	(貳)	(三)
の二	の三	の四	の五	の二	の二	の三	の四	の五	の二	の六	の七	の二	の二	
生れてより神佛をかやうに思迫め候氣にも御前様の數々御苦勞愚なる私の心得違さへある女世に比無き錦を					隣に養へる薔薇の浴すれば、下立ちて貫一は其半を盡して「忝ない。然し酒を更むると與に					「あゝ、舍して下さいまし「それから、十七八から惜くもなき命は昨日は見舞がてらに				
					○ ○ ○ ○ (校12)					○ ○ ○ ○				
第壹章					第貳章 (二)の二					第參章 (三)の二				
五一五	五一七	五一八	五二〇	五二一	五二三	五二五	五二八	五三〇	五三三	五三五	五三八	五四〇	五四二	
1	1	7	1	8	9	11	9	14	1	8	2	4	4	
四四七	四四八	四四九	四五一	四五二	四五四	四五五	四五七	四五九	四六一	四六三	四六五	四六七	四六八	
1	16	20	5	11	5	18	21	16	7	9	11	2	10	

(校12) 酒を更むる……↓話頭は酒を更むる……